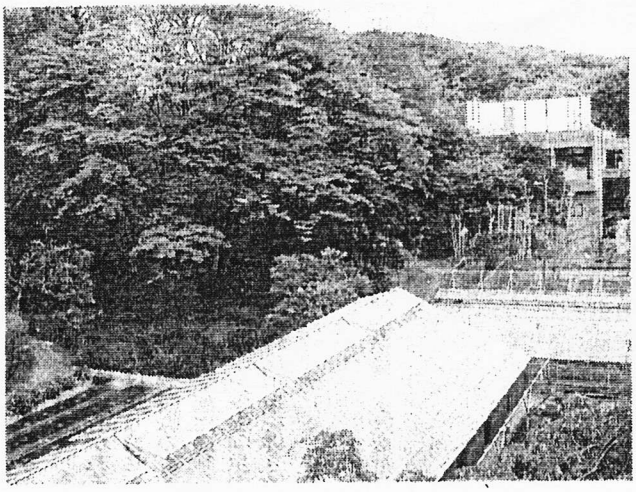
附属植物園の存続をかけて

存在意義を明確に

有志が「考える会」を設立

本学北部キャンパス東側に位置し、国内外の貴重な植物が収集されている本学理学部附属植物園の存在意義を確認するために、本学関係者や近辺住民が先月、「京大植物園を考える会」を設立した。昨秋に行われた園内伐採が直接的な設立のきっかけ。本年度から市民向けの観察会を月一回で行っていく。



数理解析研究所の東側に位置する理学部附属植物園

附属植物園は、一九二三年四月に開設された。約一万八千平方メートルの敷地に、歴代の研究者が集めた植物などがおよそ五百種。理学部以外にも農学部、工学部、薬学部などの研究でも使われ、多目的に利用されてきた。園内に生息する生物を材料に博士号を得た研究者も少なくない。

また植物園は一般に公開され、学内外の人々の知る人ぞ知る憩いの場としても活躍してきた。しかし昨秋、民家まで枝が伸びた樹木を大学側が伐採。一部では「丸ごと樹木を切る必要はなかったのでは」という話も出ており、大学側の判断に賛否両論が出た。

植物園設立当初の沿革の記述に「植物園を単に珍しい植物を集めた栽培園ではなく生態学的特色をもったものにしようとの構想のもとに建設を進めた」とある（「京大植物園を考える会」のホームページより）が、理学部植物学教室が感じているほどの重要性を周囲は理解していないという。「北部キャンパスで新しい給水タンクが必要となったとき、その適当な置き場が確保できなかったために、植物園がその敷地を提供しなければならなくなった」と当時の植物学教室主任は語っている。

植物園が昔ほど重要視されなくなってきている理由の一つに、生物学の主流が系統分類学から分子生物学へと変わってきたことが挙げられる。したがって、植物園の利用頻度が以前に比べ減ってきているのも事実。

そういった背景で、今回「考える会」が設立された。メンバーは「これまでの植物園の功績を再評価しながら、これからどれだけ研究や教育に貢献しているかを検討していきたい」としている。

観察会の日程などについてはホームページを参照のこと。アドレスはhttp://embers.tripod.co.jp/bgaem/